

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより

第79号

2024(令和6)年8月26日

(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

二千鍾紡績に対する再評価

— 評価の視点の重要性 —

日本の近代における綿業の黎明期は3つの段階に分けることができるそうです。第1段階がいわゆる始祖三紡績(鹿児島紡績、堺紡績、鹿島紡績)の段階。第2段階が十基紡績に代表される、明治政府による国産綿花を主原料とする紡績業育成政策によって進められた二千鍾紡績の段階。そして第3段階が、1万鍾規模の大阪紡績の成功に刺激された民間巨大紡績会社の競争的参入期の段階です(中岡哲郎「技術史の視点から見た日本の経験」『近代日本の技術と技術政策』国際連合大学、1986年刊、48-49頁)。

ところで、これまではこの時期の綿業に対する評価は概して低く、特に第2段階の二千鍾紡績については悉く失敗であったとする評価が一般的でした。

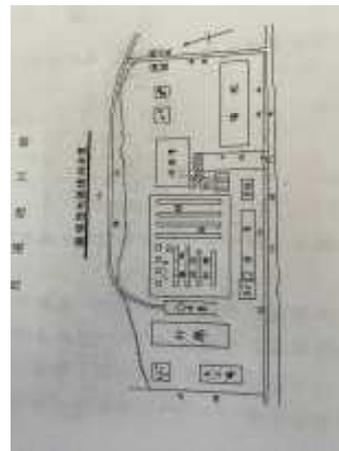
「従来の技術史研究者によるこれらの初段階の評価は概して低かった。…第2段階の2000鍾紡績が、惨憺たる失敗と形容してもよいほどのものであったことについては、ほぼどの研究者も一致している。」(前掲50頁)とある通りです。この点については拙稿「教祖伝の時代と大和の綿作」(『天理教校論叢』第46号、天理教校本科研究室編、2021年刊。27頁、註11参照)においても触れたことがあり、本誌第6号(2017年6月号)においても「時代を読む—豊井紡績所と西陣織—」で取り上げています。

ところが、近年、この評価が見直されつつあることを知りました。昨年刊行された阿部武司『日本綿業史—徳川期から日中開戦まで』(名古屋大学出版会、2023年刊)には以下のように記されています。

「しかし、近年では、二千鍾紡績が必ずしも弱体ではなく、明治中期以降かなりの発展を遂げ、後述の日清戦後の不況まではもちこたえた企業が少なくないことが注目されるようになった。まず、中岡哲郎により、それらの企業の多くが十九世紀中には存続していた、という鋭い批判が提起され、高村直助が、この説を受け入れて二千鍾紡績の脆弱性を論じていた自説を改めた。そして高村は、それらの企業の経営不振には創立が松方デフレと重なったことの影響が大きいことを指摘し、一八八六年以降の景気好転、資金水準の地域間格差、機械払下代金の政府による棄捐処分といった外部的条件もさることながら、一八八〇年代半ば以降の中国産綿花の使用、昼夜二交代制の採用、いくつかの企業における設備拡充に支えられて、日本初の資本主義的恐慌といわれる一八九〇年の景気後退にも長崎紡績所を除き破綻が発生しなかったことを解明した。二千鍾紡の多くはその後の日清戦後の不況期に姿を消すものの、意外に強靱であった。」(48頁)

奈良県天理市において明治16年に開業した十基紡績所(二千鍾紡績)の一つ、豊井紡績所の廃業は明治32年(1899)です。

おもしろいのは前掲中岡哲郎氏の評価です。筆者なりに要約すれば「何もわからない子どもが外国製の精密機械を渡され、教えを乞う師もいない状況で、まがりなりにも一定期間それを使い続けることができたという事実は、いかに生産効率が低かろうと、それはもはや奇跡というほかない」という見解です。そして「彼らがその悪戦苦闘をとおして獲得したもの」を見落としてはならない、と。高村直助「二千鍾紡績の蘇生」『企業勃興—日本資本主義の形成』(ミネルヴァ書房、1992年刊)と合わせて、評価の視点の重要性について考えさせてくれる感動的な内容に勇気づけられます。



豊井紡績構内想像図*

----- Monthly Data -----

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 令和6年7月26日～令和6年8月25日)

千葉県1

【H.A.M.A.木綿庵】(令和6年7月26日～令和6年8月25日)

メールを含む各種相談件数8、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数4組12名



《綿の栽培記録 2024》－ 令和6年度版 その5 －

綿が吹きはじめました。10号畑(5月3日播種)で8月14日に和綿の初開絮を確認、洋綿は8月22日に確認しましたが、その様子から21日に開絮したものと思われます。したがって今季の公式記録として初開絮日を、和綿は8月14日、洋綿は8月21日とさせていただきます。今夏は異常なまでに降雨がありません。7月21日に近畿地方の梅雨明けが発表される以前から晴天が続き、これまでに雨が降ったのは8月4日-5日と、19日-20日のみ。灌水の大切さについてはブログ「2024年綿の栽培記録」をご参照ください。

《奈良シニア大学より一行7名来畑》 令和6年8月7日(水)

秋の文化祭における研究発表に向けて調査のため来畑くださる。奈良シニア大学には奈良校、橿原校、東京校があり、今回来畑くださったのは橿原校のみなさま。奈良シニア大学は「一般教養講座、選択科目講座に加え、年間イベントやサークル活動などにも参加できる新たな生涯学習」の場、とのこと。

写真は左から10号畑の和綿赤木の開絮の様子と、10号畑を南西隅から見た様子、7号畑から10号畑をのぞむ様子。



写真は左から10号畑の洋綿(アブランド)の開絮の様子と、蒴果をつけた枝の様子。李さんの綿木の様子とその花。



【研修等の記録】

- ・ 令和6年07月27日 タビオ奈良株式会社様の綿畑(北葛城郡広陵町)を見学。島田氏、北野氏と懇談。
- ・ 令和6年08月07日 奈良シニア大学より一行7名来畑。綿畑案内、栽培の歴史と加工工程について説明。
- ・ 令和6年08月08日 全国コットンサミットの天理大会の基本コンセプトおよび初日のプログラム素案について懇談(大阪府中央区ホリーズカフェにて)。出席者は全国コットンサミット実行委員会本部事務局松下様、島田様、木綿庵代表梅田。
- ・ 令和6年08月15日 大阪歴史博物館(大阪府中央区大手前)、大阪府立中之島図書館(北区中之島)を訪ね、大阪の綿業について資料収集。
- ・ 令和6年08月17日 奈良県立図書情報館(奈良市大安寺西)を訪ね、奈良の綿業について資料収集。
- ・ 令和6年08月21日 奈良県中小企業家同友会組織強化委員会/やまと中央支部合同例会「ようこそオリエンテーションへ」(大和郡山市 市民交流館)にゲスト参加
- ・ 令和6年08月25日 「李さんの綿」(本誌第78号参照)を栽培されている畑(奈良西ノ京)を訪問、見学

*1面の写真「豊井紡績構内想像図」の出典は、『本邦綿絲紡績史』第二巻(昭和12年刊)362頁